

映像制作がもたらす能力開発 ～NHK BS 番組「@キャンパス」制作報告～

間 島 貞 幸

【要旨】 大学における映像制作がもたらす能力開発の実践事例は少なく、制作導入の方法論、理論的検討は十分とは言えない。今後、関係者による情報交換を積極的に行い、その教育的価値について理論化することが重要であり、そのために事例のさらなる蓄積が必要となる。

今回、本学の学生たちが番組制作会社のスタッフと共同して番組を制作した。新たな人間関係のもと制作を通して、コミュニケーション力の向上、物事を客観的にまた多角的に見る視点の獲得など、様々な能力が高められる傾向が見られた。今回の実践内容を報告し、今後の映像制作の実習授業の設計について考察と提案を行う。

【キーワード】 映像制作、メディア・リテラシー、大学教育、デジタル映像、メディア表現、情報発信、実践教育

1. はじめに

筆者は3年前より大学教員として映像制作がもたらす能力開発について実践研究を行っている。それまで20年間、ディレクターとして東京キー局のテレビ番組の制作に携わってきた。その経験から『映像制作は、そのプロセスにおいて多くの困難な状況に直面する。それらの問題を仲間と共に解決しようとするプロセスが様々な能力開発につながる』と考えている。

映像制作がもたらす能力開発についてその重要性が指摘され、各大学で以下のような報告がある。例えば、松野¹⁾は「コミュニケーション能力」「協調性」「責任感や社会性」「構成能力」「広報宣伝能力」「取材能力」「マネジメント能力」「リーダーシップ」「絶対に崩れない自信」をあげている。伊藤²⁾は「創作・構成能力」「コミュニケーション・プレゼンテーション能力」「プロジェクト遂行能力」をあげている。塚本³⁾は「異なった視点から物事を捉える能力」「映像・音・文字を使った効果的なコミュニケーション

能力」「メディア情報を読み解く力」「地域の文化理解」「デジタル編集技術」をあげている。五嶋⁴⁾は「ゼロからの発想力」「コミュニケーション力」「強調力」をあげている。

しかし、大学における『制作を通して学ぶ』実践研究について村田⁵⁾は「制作導入の方法論、理論的検討の蓄積は不足している」と指摘している。今後、関係者による情報交換を積極的に行い、その教育的価値について理論化することが重要である。そのために事例のさらなる蓄積が必要となる。

2011年2月、本大学の学生と番組制作会社のスタッフが共同してNHK BSの番組を制作することになった。学生たちは教員の手を離れ、プロの仕事ぶりを直に体験し番組を完成させる。そのプロセスにおいてどのような問題を抱え、どのようにそれらを解決し、最終的にどんな能力が開発されるのか。新たな実践事例としてその内容と学生の変化や課題について報告する。

2. 実践研究の概要

2.1 実施内容

今回は大学の授業における映像制作の実践ではない。NHK BS1の番組「@キャンパス」をNHKや番組制作会社のスタッフと本大学メディア情報学部の学生が共同して制作する。番組の企画からリサーチ、NHKプロデューサーへの企画のプレゼンテーション、撮影、演出、編集、スタジオ出演までを行う。

2.2 番組「@キャンパス」について

「@キャンパス」は、大学生が番組の企画立案から取材までに関わり、情報を発信する20分の国際情報番組である。同番組はNHK BS1にて2009年4月から2011年3月まで毎週放送され、およそ70の大学が番組制作に参加した。

番組は制作を担当した学生の大学紹介に始まり、以下の3つのコーナーと学生たちが出演するスタジオ部分で構成されている。

「@ワールドニュース」1週間に起こった海外でのニュースや話題5項目から1つをピックアップし、問題点や解決策をゲストと学生たちとで議論するコーナー。

「@インタビュー」海外の歌手やアーティストに学生リポーターが直撃インタビューするコーナー。なお、このコーナーでは全編英語（または取材対象者の母国語）でのインタビューとなる。

「@スペシャル」キャンパス内外のトレンド情報・現象を学生の視点で紹介するコーナー。大学内での実例を挙げながら紹介する。

2.3 参加者の属性について

実践に参加した学生はメディア情報学部の有志12名である。このうち映像制作の経験者は筆者ゼミの3年生4名と2年生1名のみである。「インターシップⅡ」を受講している1年生7名は制作経験がない。学年が異なりグループ全体として初対面同士が多かった。学生スタッフのリーダーには、制作

経験のない1年の男子学生が名乗り出た。筆者は1年生リーダーを中心に先輩たちがフォローしながら、番組を完成出来れば良い、と期待した。なおこの実践に参加しても大学の単位を取得できるわけではない。

一方、テレビ番組制作者はNHKプロデューサー1名、NHKの系列会社プロデューサー1名、制作会社プロデューサー2名、アシスタントプロデューサー1名、チーフディレクター1名、ディレクター1名、AD1名、ほか編集時のヘルプとして制作スタッフ4名、収録当日にカメラマン、照明など技術スタッフ7名が参加した。

2.4 実施のスケジュール

2010年11月から数回に渡り、制作会社のスタッフが大学に来て学生の募集を行った。

「@キャンパス」は、企画から撮影、編集、スタジオ収録までを6週間で行う。春休み期間中の2011年2月3日に制作会社スタッフと学生で第1回目の企画会議を行った。以降、作業は日曜日も含めて毎日10時から18時まで行い、スタジオ収録が近づいてくるとさらに遅くまで作業を続けた。そして3月13日、駿河台大学で番組収録が行われ、学生が関わる作業はすべて終了した。

2.5 番組制作環境

番組を制作していく上での制作会社側との細かい調整については、大学の学務課が担当した。平日はインターネット環境が整っている大学の教室や会議室を番組のスタッフルームとして使用した。ただし、日曜日は東京赤坂にある番組制作会社で作業を行った。また、デジタルビデオカメラ(HVR A1-J)2セットと編集用のパソコン2台は番組制作会社からの貸し出し機材で、編集ソフトはFinal Cut Proを使用した。

2.6 実施の記録方法

今回の実践において筆者は学生とテレビ番組制作者たちを陰で支える、いわば相談役という立場で参

加した。慣れない環境で学生たちが自ら考え、悩み、行動し、テレビ番組制作者たちと協力しあって番組を完成させることを期待して、筆者はなるべく学生たちと距離を置くようにした。ただし、ビデオカメラやデジタルカメラ等で時間の許す限り番組制作の様相を記録していった。制作途中と番組収録直後に2回、学生たちにインタビュー取材を行った。さらに放送後、「番組制作に関するレポート」を提出させた。

2.7 「@キャンパス」のプロセスと学生の変化

学生とテレビ番組制作者とのおよそ6週間に渡る活動の中で、学生たちはどのように変化したのか、紹介していく。

1) 番組の企画

2011年2月3日「駿河台大学@キャンパス」の番組制作がスタートした。当面学生たちは、キャンパス内外のトレンド情報・現象を学生の視点で紹介する番組のメインコーナー「@スペシャル」の企画を考えることに時間を費やした。チーフディレクターとディレクターが一日おきに大学に来てリサーチの進行具合を確認し、アドバイスした。企画のテーマはいくつか想定し、それに該当する学生がいるかどうか、知り合いの学生を中心に直接声をかけて探した（最終的に企画のテーマは“就職難の中、職人を目指す若者が増えつつある実態を追う”に決定した）ところが、春休み期間中でキャンパスにはほとんど学生がいなかったため、人探しは難航した。さ



写真1 「駿河台大学@キャンパス」第1回企画会議の一場面

らに経験不足のため、企画の趣旨をうまく伝えることが出来なかったり、企画提案会議の日が迫っているのに企画内容がなかなか決まらない、という焦りから強引な態度で学生に接してしまい反感を買ってしまうことがあった。それでもめげることなく今度は見知らぬ学生に声をかけたり、教授の研究室を訪ねて人探しをした。その結果、知らない人に対して自分から話しかけることが出来る度胸がついていった。

番組制作がスタートすると、就職活動中の3年生などが休みがちになり、気がつく活動しているのは1年生数名のみ、という状態が続いた。筆者が学生たちに事情を尋ねたところ、3年生は『就職活動とスケジュールがかぶるので今回は1、2年生のお手伝いとして参加しよう』と考えていて、対する1年生は『映像制作の経験がないので先輩たちのお手伝いをしよう』とお互いに意思確認をすることなく、勝手に頼り合っていたことが判明した。そこで筆者は番組を作る仲間として自分の考えや思いを相手にきちんと伝えるようアドバイスした。その後、学生たちは学年の垣根を越えて言いたいことが何でも言える関係へと変化していった。また学生からの提案で番組スタッフの連絡網を作り、ケータイメールを通じて情報を共有することにした。結果、チームとしての“一体感”が生まれ、後の作業が実にスムーズになっていった。

2) 企画提案会議

企画がなかなか決まらず、結局2回NHKを訪問し、企画提案会議を行った。メインコーナー「@スペシャル」の企画を進めていた1年生が、企画書を作成した。だが、ディレクターからなかなか承諾がもらえず、何度も書き直した。その際、ディレクターから『自分だけにしかわからない内容では駄目で、視聴者の立場に立って検討していかなければならない』と繰り返し言われた。企画提案会議では1年生が企画のプレゼンテーションを行い、3年生が補足説明した。学年の垣根を超えてさらに連携が良くなっていった。

表1 「駿河台大学編@キャンパス」制作スケジュール

「駿河台大学編@キャンパス」スケジュール

週	月	日	曜	大学側行事等	学校紹介(1・2名)	ニュース(1・2名)	インタビュー	スペシャル(3~4名)
5・6週前	2	1	火		アイデア出し・プレスト・リサーチ・企画練り上げ			
		・						
		・						
4週前	2	13	日		企画提案会議@NHK(所要時間1h30m)			
		14	月					
		15	火					
		16	水					
		17	木					取材相手選定
		18	金					
		19	土					
3週前		20	日					仕込み期間
		21	月					
	2	22	火					
		23	水					
		24	木					
		25	金					
2週前		26	土					(構成会議@NHK)
	2	27	日					
		28	月					
		1	火					
		2	水					
		3	木					
1週前		4	金					撮影取材期間
		5	土					
		6	日				編集準備	
		7	月				編集準備	
		8	火				編集準備	
		9	水				自由	
1週前		10	木		編集・収録台本作成・試写・リハーサル			
		11	金					
		12	土					
	3	13	日					
					収録@駿河台大学キャンパス			

3月17日(木)18:00~18:20放送 NHKBS1

3) 企画リサーチ・取材対象者探し

「@スペシャル」の企画の方向性が決定すると各コーナー(学校紹介班・@ワールドニュース班・@インタビュー班・@スペシャル班)ごとに担当者を分

けた。学生たちはコーナーごとにディレクターに企画内容をプレゼンし、何度もやり直しさせられた。

『独りよがりの内容で視聴者には伝わらない』というのがやり直しの理由だった。学生たちは企画した



写真2 「駿河台大学@キャンパス」リサーチの一場面

内容をテレビ番組として放送できるレベルまでいかに内容を充実させるか、その難しさを知った。「@スペシャル」コーナーは最後まで取材対象者探しに苦勞した。企画内容は「不景気な世の中であって職人を目指す学生が増えつつある現状を紹介する」というものでVTRの構成上、職人志望の学生をあと1人は探さなければならなかった。学生リーダーの1年生がある日、キャンパスにいた学生に声をかけたところ、偶然、この春から職人になる学生であることがわかった。この一件から学生たちは「最初から無理だと諦めたら何も出来ないが、諦めずに最後まで粘り強く探し続ければなんとかならないことはない」ことを自らの経験から思い知ることとなった。

4) 番組収録事前打ち合わせ

番組収録前日、「@ワールドニュース」のコーナーで『子だくさんの親に減税を決定したロシアの少子化対策のニュース』について学生たちが番組に出演して討論する内容を考えた。学生全員が意見を出し合い、それぞれの意見をメモに書いて模造紙に貼っていった。なかなかまとまらず、打ち合わせ時間が大幅に過ぎた。学生たちはおよそ6週間、ほとんど休みもとらず、肉体的にも精神的にも追いつめられていた。だが、学生の表情は意外にも活き活きとしていた。締め切りの時間ギリギリまで考える番組制作者たちの姿勢に刺激を受け、学生たちは「番組を作る面白さ」を知り、とことん考える粘り強さが備わってきたように思えた。



写真3 「駿河台大学@キャンパス」“学生紹介”撮影の一場面



写真4 「駿河台大学@キャンパス」収録事前打ち合わせの一場面



写真5 「駿河台大学@キャンパス」学生が考えた収録用メモ



写真6 「駿河台大学@キャンパス」収録の一場面

3. 実践研究の結果

3.1 学生の感想

学生たちは番組制作のプロセスで一体どんなことを学んだのだろうか。学生が書いたレポートの一部を紹介する。

1年男子 「当初はお互い知らない人が多くて何か遠慮がちで気を使ったりして、ぎこちない感じでした。しかし制作が進むにつれて全員仲良くなりました。先輩とも気兼ねなく話せるようになりました」

3年女子 「@スペシャルのゲストを探す中で、ディレクターやADさんは人に協力してもらえるよう上手に導いていました。そして聞き出すことも上手いので、とても勉強になりました」

番組制作を経験した後の変化について書かれた文章を紹介する。

1年女子 「取材対象を探すときの経験によって、知らない人とも話せるようになりました。また、番組制作をしたことで少し自分に自信が持てて、ゼミや実習の班でリーダーをやっています。以前はリーダーなんて頼まれてもやらなかったもので、これは大きな変化だと感じています」

1年男子 「世の中で起こっている出来事に対し、ものの考え方が変わりました。何か1つの事にも、いろいろな『どうして?』があるのだなと思いました」

1年男子 「取材の仕方・依頼、めげない気持ちなどの、技術や精神面が鍛えられた。また、人脈も増えた」

3年女子 「メンタルが少しだけ強くなった気がする」

1年男子 「資料を粘り強く探し続けたので、何か分からないことがあるとすぐに調べる癖ができました」

3年女子 「すぐに電話できる度胸もつきました」
2年男子 「物事を別の視点から見るようになりました」

番組制作の面白さについて書かれた文章を紹介する。

1年男子 「番組制作に関わらなければ出会えなかった人に出会い、間近でプロの人達の働きを見ることが出来たのが良かったです」

1年男子 「チームで何か成し遂げるのは本当に楽しいと思えたこと」

2年男子 「普段の生活では関わることの出来ない人達と関わったことと、番組作りの大変さと面白さを体験できたこと」

自分の中に課題を見つけた文章を紹介する。

1年男子 「企画会議で思うようにアイデアが出せなかったので日頃からアンテナを張って過ごしていかなければならないと痛感した」

1年女子 「企画を考えるときに、いかに自分の周りのことに無関心だったのか気づかされた。これからはもっと周りの人、もの、できごとに興味を持つようにしたい」

1年男子 「自分の頭にあることをしっかり言葉に



写真7 「駿河台大学@キャンパス」収録を終えて記念写真の一場面

できて、それを他人にわかりやすく伝えられるようにすること」

2年男子 「行動するまでのスピードを上げること、いろいろな角度で物事に取り組めるようにすること」

3年女子 「とにかく行動は早くするというです。リサーチは早く行うべきだと思います。早く知っておけばまた別の情報を集めなければならない状況になるかもしれないし、時間に余裕もできます」

3.2 考察

1) 良かった点

テレビ番組制作者が番組を放送するために締め切りの時間ギリギリまで努力する姿を間近に見て、学生たちは映像作品を作る上での意識が確実に変化した。例えば、ひとつのアイデアを番組の企画としていかに形にしていくか、より多くの視聴者に見てもらうためにいかに見せ方を工夫するか、物事を客観的に見る視点や多角的に見る視点の芽生えなどである。また心身ともに鍛えられたことでリサーチのスピードが上がったり、見知らぬ人と話す度胸がついたり、取材対象者への説得について自信がついたりしたようだ。映像制作を通した人との出会いやグループ活動による共同関係の形成など得ることが大きいことがわかるだろう。

テレビ番組制作者たちは、学生たちをもっと都合よく扱えばもっとスムーズに番組を作ることができたはずだが、粘り強く学生たちを見守り、指導していただいたこととても感謝している。途中、学生間の意思疎通がうまくいかなかったため制作の進行が遅れるなど問題も見受けられた。だが、プロの厳しさに押しつぶされることもなく、終盤になって追いつめられた状態でも学生たち全員が番組作りを楽しんでいたのは、大きな成果と言えるのではないか。今回のようにひとつのこと（映像作品を作ること）にじっくり時間をかけて集中して取り組む機会などなかなかあるものではない。そういう意味で参加した学生たちにとって、とても貴重な経験となったは

ずである。今回の経験をもとに今後、あらたな挑戦を続けていくことを望む。

2) 全体を通しての考察

筆者は、多様な人間関係の中でいろいろなジャンルの映像作品を制作、発信することでコミュニケーション能力ほか様々な能力が開発されると考えている。特に今回の実践で注目すべき点は、“外部スタッフとの共同作業”と“学年を超えた共同作業”という点である。新しい人間関係の中で絶えずプレッシャーを感じながら、積極的にコミュニケーションを図り、協力し合って一つの番組を完成させる。今回の貴重な実践をぜひとも大学における映像制作の授業に活かしていきたい。

具体的には、学年を超えた新たな枠組みの映像制作の実習授業や外部の人を巻き込んで共同して映像作品を制作する授業を新たに設けることである。そしてこれらの実践を継続的に行うことが重要である。ただし実施に関しては、90分の授業の枠組みに収まりにくく、授業時間外の作業が確実に増えることが予想される。大学の教室から飛び出して外部で活動する機会が増えると学生の活動に目が行き届かなくなり、指導しづらい点が課題となる。今後も試行錯誤を繰り返しつつ、「制作を通して学ぶ」実践を続けていきたい。

参考文献

- 1) 松野良一、『市民メディア論～デジタル時代のパラダイムシフト』ナカニシヤ出版、2005年。
- 2) 伊藤敏朗、『大学ゼミにおける映像制作教育—DVシネマと定期テレビ番組の制作実践』、松野良一、『市民メディア活動—現場からの報告』、中央大学出版部、2005年、p.117-131。
- 3) 塚本美恵子、『高等教育における実践的メディアリテラシー教育の試み：地域との連携を目指して』（平成16年度～平成18年度科学研究費補助金 基盤研究C研究成果報告書、研究代表者：塚本美恵子）、2007年。
- 4) 五嶋正治、東海大学紀要文学部、2010年。

5) 村田雅之、『大学のメディアリテラシー教育における「制作を通して学ぶ」パタンの実践』、

情報コミュニケーション学会誌 (ISSN 1349-8061) Vol.No.s1&2、2008年。

The ability development that picture production brings
—NHK BS PROGRAM “@ CAMPUS” PRODUCTION REPORT—
by MAJIMA Sadayuki

[Abstract] There are few practice examples of the ability development that the picture production in the university brings, and there are not methodology of the production introduction, the theoretical examination despite ten minutes. I perform the information exchange by the person concerned positively, and it is important that I theorize it about the educational value, and therefore the further accumulation of the example will be necessary in future.

Students of this University produced a program in cooperation with a TV program producer this time. As for the thing of new human relations, a tendency raised various ability including the acquisition of the viewpoint to watch the improvement of the communication power, things from different angles again objectively was seen through production. I report this practice contents and perform consideration and suggestion about the design of the training class of the future picture production.

[Key Word] picture production, media literacy, university education, a digital picture, media expression, information dispatch, practice education